

学びの場における心理的安全性を実現する アセスメントツールの開発を目指して

河口紅^{*1}・大脇巧己^{*1}・篠田有史^{*2}・吉田賢史^{*3}
Email: kawaguchi@sanps.jp

*1: 一般社団法人さんぴいす
*2: 甲南大学全学共通教育センター
*3: 早稲田大学高等学院

◎Key Words 心理的安全性, 自己肯定感, 自己受容, アセスメントツール

1. はじめに

我々は、個人の思考・行動・認知特性を客観的データとして表現するアセスメントツールの活用を通じて、児童や生徒にとって効率的かつ理解しやすい授業の実現を目指してきた。15年前の2010年PCCにおいて「子どもの思考特性に応じた効果的な指導法」の分科会発表を行った。河口はその後、兵庫県立大学においてキャリアデザインの授業を担当することとなった。早稲田大学高等学院の吉田氏が開発したアセスメントツール(4shapes®)を授業で使用したところ、受講した学生の自己肯定感が高まる傾向を示した。子ども達の自己肯定感を育むことは大切なことであるが、どのようにすれば自己肯定感を高められるかについては、未だに結論が出ていない。

その上、ユニセフの2020年の調査では日本の子どもの精神的幸福度は調査を行った38カ国中37位と2番目に低く、その原因の一つとして指摘されているのが子ども達の自己肯定感の低さと子どもだけでなく日本の大人の自己肯定感も低いことである。

大人の自己肯定感にはこれまでの日本式経営が影響している可能性がある。トップダウンや年功序列が当たり前であり、経営者や上司への忖度や組織に対するマイナスの情報は隠蔽されることが多く、自由な発言や正当な議論がしづらい環境が長く続き、自分の意見を堂々と発言出来ず、自己肯定感が低下したと考えられる。

学びの場である学校や家庭においても似た環境があるのではないだろうか。

子ども達にとって、教員や親の言うことは絶対であり、授業中に自由な発言や間違った答はできない。と思っていないだろうか。

今こそ、学びの場において心理的安全性を確保し、子ども達が思ったことを自由に発言し、議論を繰り返すことで自己肯定感を育む取り組みが必要であると考ええる。

本発表では大学における実践結果と新たに開発を始めたアセスメントツールについての現状を述べたい。

2. 兵庫県立大学「キャリアデザイン」の授業内容

河口は2014年より兵庫県立大学神戸商科キャンパスにおいて「キャリアデザイン入門」(当初は「キャリアデザイン」)を担当している。履修可能な学生は国際商経学部、

社会情報科学部、看護学部であるが履修者のほとんどが1年生である。

講義の目的は「日頃から問題意識をもつことによって、今後のキャリア(生き方、働き方)について考え、自己を見つめ、実現したい思いを行動に移す力を身に着ける」ととし、授業ではグループワークやグループディスカッションを通し様々な意見の中から自分の考えを深めると共に、社会人になる前の学生時代にできること、やりたいこと、すべきことを考え目標を達成するために、いつまでに何をしたらよいかを判断できる能力を身につけてもらう。

学生に対する到達目標は次の3点である。

- ・4shapes®(自己分析)の結果を用いて特性を理解することにより自分らしく生きられるキャリアを予測する。
- ・将来を見据えた上で充実した学生生活を過ごすための目標設定ができるとともにその計画に基づいた行動にうつせる。
- ・グループディスカッションを通して議論の仕方を学び、多様な視点に触れることで他者と異なる意見であっても主張ができる。

全15回の授業の内容は

- 1～3回 ガイダンスと大学生活での目標設定
- 4～7回 自己分析
 - 1) 価値観の深掘り
 - 2) 内面特性の理解
 - 3) 外面特性の理解
 - 4) 自己の興味・関心の順に分析
- 8～12回 外部講師のキャリア講演と多様な働き方や業界の分析
- 13～14回 キャリアアクションプランの作成
- 15回 アクションプランのプレゼンテーション

15回目の授業では、学生が一人ずつ将来のキャリアを見据え、今後の大学生活をどのように過ごすかを言語化し、プレゼンテーションをおこなう。

3. アセスメントツールがもたらす効果

3.1 グループワークに対する意識の変化

授業で使用したアセスメントツールは4Shapes®である。

これは人の内面特性（分析・秩序・社交・発想の4つの思考特性）と外面特性（表現・主張・柔軟・判断）を数値で確認することができるツールである。さらに、内面特性はインプット特性とアウトプット特性として数値化されるため、自分の強みや弱みを簡単に理解できるものである。

自己分析の最初の授業では、4shapes®の結果をもとにグループ分けをおこない、提示する課題を話し合うグループワークを行う。この時のグループの分け方は内面特性のインプット特性が同じ者同士をグループにするが、学生にはグループの分け方の意図を事前に知らせず、ワーク終了後に同じ特性同士を集めたグループであると知らせる。すると、授業後に学生が提出するリアクションシートには「似た者同士のおかげなのか安心して話ができた。」「今までの授業で一番話しやすいグループワークだった」など「話しやすさ・安心感」に言及した学生が提出者31名中15名と約半数がこれまでのグループワークに比べて安心して取り組めたと明言した。これは教室内に心理的安全性が保たれていると学生が感じていることになる。更に別の9名の学生から「似た者同士では同じ意見しか出てこないのではないか」「違う特性の人の意見が聞きたくなった」という趣旨の記述があり異質性への興味を持つ学生がいることもわかった。このようにアセスメントの特性を活かしたグループワークをおこなうことで、学びの場における心理的安全性を高めることができる。また、自分とは異なる意見に対しても興味関心を持たせることが可能であることが明らかになった。

3.2 自己分析の前と後での意識の変化

授業直後のリアクションシートからも意識の変化は見られたが、本授業の学生が作成した最終レポートを質的に分析したところ自己分析の授業の前後で学生の自己肯定感やキャリア意識の変容が見られたので報告する。

表1は今回行った調査の概要である。

表1 調査の概要

対象	2024年度後期開講のキャリアデザイン入門受講者のうち、最終レポートを提出した43名。
手法	4shapes®による自己分析を講義内で実施し、最終レポートから「自己分析前の状態 (Before)」および「分析後の変化 (After)」に関する記述を抽出。
分析	テキストマイニング手法に基づき、キーワードを分類。変容の程度を「顕著な向上」「やや向上」「変化なし/明記なし」の3分類に整理し統計的傾向を把握した。

図1は学生が提出した自己分析の授業の前に提出したレポートをテキストマイニングした結果で、図2は授業後に提出したレポートのテキストマイニングの結果である。授業前のレポートには否定的な言葉が目立っているが、授業後は肯定的な単語や文章が増えていることが確認された。

表2は自己分析の授業終了後のレポートから自己肯定感の変化を確認した結果である。自己肯定感の向上が見られるとやや自己肯定感の向上がみられるを足すと88%

もの学生が自己肯定感が高まっていると感じていることがわかる。

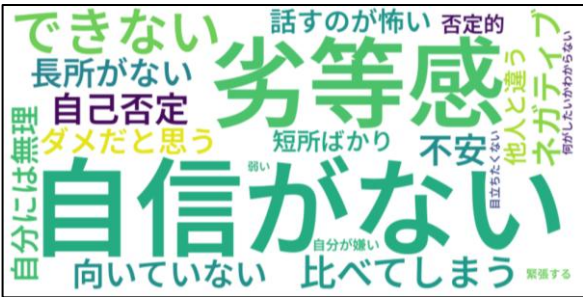


図1 自己分析の授業以前の結果

- ・自信のなさ・劣等感 (12名)
 - ・自己表現や他者比較への苦手意識 (7名)
 - ・将来の不透明感・キャリア不安 (10名)
 - ・自己理解の曖昧さ・誤認 (6名)
- (※複数記述あり)



図2 自己分析の授業後の結果

- ・自己受容・自己肯定感の向上 (18名)
 - ・強みの認識と活用意識の芽生え (18名)
 - ・行動変容・挑戦意欲の増加 (11名)
 - ・将来への安心感・キャリア構想力の向上 (19名)
- (※複数記述あり)

表2 授業後の自己肯定感の変化

学生の授業後の変化	人数	割合
自己肯定感の向上がみられる	31名	72.1%
やや自己肯定感の向上がみられる	7名	16.3%
変化なし/明記無し	5名	11.6%

これらのことから、4shapes®を用いた自己分析により、学生達は自分自身の特性を客観的に理解し、自己否定からありのままの自分を受け入れ、自分らしく生きることを目指す自己受容の意識を芽生えさせ、授業内のグループディスカッションで自分の意見を率直に言い合える雰囲気为自己肯定感の変容を補完する重要な要素となった。

本授業ではガイダンス時にキャリアデザインを学んだ理由を学生に提出させているが「履修容易科目 (楽単科目)」といういわゆる受動的な理由が多く、教え手として困惑することが多かったが、授業を通じ自己肯定感を高めることができた学生たちは最終授業のプレゼンテーションに能動的に取り組み、自分の意見を他者に対し堂々と発表することができる力を身につけることができた。

4. 学びの場における心理的安全性を目指して

4.1 国内の現状

心理的安全性が着目されたのは、Google が 2012 年から 2014 年にかけて行った組織を活性化させるための研究 (Project Aristotle) の成果として、組織のパフォーマンスを高める 5 つの要素を発表し、心理的安全性が 5 つの要素の中の土台であり、5 つの中で最も重要な要素であると発表したことを機に Google 社以外の企業も率先して心理的安全性を高めるための取り組みを始めている。表 3 は Google 社が発表した 5 つの要素である。

国内においても大手企業を中心に心理的安全性を高めるための取り組みが数多く始められているが、学びの場である学校においては残念ながら心理的安全性を考慮した取り組みはそれほど進んでいないのが現状である。

表 3 組織のパフォーマンスを高める 5 つの要素

	要素名	内 容
1	心理的安全性 (Psychological Safety)	発言や失敗をしても非難されず、安心して関われる環境
2	信頼性 (Dependability)	互いに責任を果たすと信頼できる
3	構造と明確さ (Structure and Clarity)	役割・計画・目標がはっきりしている
4	仕事の意味 (Meaning)	自分の仕事に価値や意義を感じられる
5	仕事のインパクト (Impact)	自分の仕事がチームや社会に貢献していると感じる

4.2 学びの場における心理的安全性とは

教員に心理的安全性の保たれたクラスをイメージしてもらうと、クラスの子も達が仲良く、明るく楽しい授業がおこなえているクラスを思い浮かべる人が多いようである。しかし、我々が考える学校での心理的安全性とは異なる概念である。それは、異なる意見であっても誰の目にも気にせず発言することができ、発言した内容を誰からも否定されず、一つの意見として受け入れられる環境のことである。さらに、互いの意見を尊重しながら白熱した議論が行える授業であり、教員や保護者、友達に対しても「勉強がわからない」「先生の言っていることが理解できない」と素直に言える関係性を作ることである。

異なる互いの意見を尊重し受け入れるためには、相手がなぜそのような意見を持つのか、発言するのかを知る必要がある。そのためには、自分と相手の違いを受け入れ互いに尊重しあう必要があり、これは子ども同士だけではなく、子どもと教員、保護者の間にも必要なものであるため、プロフィールやアセスメントツールを活用することで人それぞれの特性を視覚化し、自らの特性の理解と他者と自分の「普通」が違うことを互いが気づいてもらうことで、自己肯定感だけでなく、他者肯定も同時におこなえる環境づくりを目指してきた。

Google 社の発表は、企業といった組織を念頭とした発

表であったが、これを学びの場に置き換えて考えてみた場合、上述のような環境での学びが実現すれば表 4 のような成果が学びの場においても得ることができると我々は確信している。

表 4 学びの場における要素と内容

	要素名	内 容
1	心理的安全性 (Psychological Safety)	誰もが安心して、自分の意見が言える学校や人間関係のある環境
2	信頼性 (Dependability)	児童生徒、教員、保護者に互いの信頼関係が生まれ相互協力ができる
3	構造と明確さ (Structure and Clarity)	互いの強みを活かした役割分担や目的の共有がなされる
4	学びの意味 (Meaning)	皆が「学び」は自分にとって意味があるものと感じることができる
5	学びのインパクト (Impact)	皆が「学び」には意義があり良い変化を生むものだと感じている

5. 新たなアセスメントツールの開発を目指して

5.1 レジリエンス力

これまで活用してきたアセスメントツールは人それぞれが持つ思考や行動、認知といった特性を測定するツールであり、自己肯定感を高める効果も期待されるものであるが、人の特性はあくまでその人の得意や苦手、強みや弱みを客観的に数値化しただけのものであり、能力を測定しているものではない。能力とは様々な複合要因から生み出される総合的な力であり、特性が活かされてこそ高まる力とも言える。では、特性を活かす要因にはどのようなものがあるのだろうか。例えば、人の精神状態で「やる気」や「平常心」は特性を発揮させる可能性を秘め、逆に「なまけ心」や「無関心」などは特性の発揮を妨げるのではないか。そこで我々は、レジリエンス力に注目することにした。

レジリエンス力とは「心のしなやかさ」とも言い換えられるように、何か大きな負荷がかかることでやる気や将来への展望が見いだせなくなっている状態から、原因である負荷を減らし正常な精神状態に回復するための力のことである。例えるならば、竹や柳の木に雪が積もりしなった状態から、折れることなく雪を跳ね除け元の形へと戻る力そのものである。

レジリエンス力が高い人は自己肯定感も高くトライ＆エラーを繰り返すことが得意である。との仮説を立て、人の特性とレジリエンス力の関係を測定可能な新たなアセスメントツールの開発を目指した研究を始めている。

5.2 反射脳と吸収脳

もう一つの要素として検討を始めているのが反射脳と吸収脳についてである。どちらも我々が独自に作り出した言葉であるが、人がコミュニケーションをとる際の癖をあらわした言葉である。表 5 にそれぞれが好むコミュ

ニケーションの例を挙げているが、反射脳とは、相手に言われた言葉や単語の一部に対し、即答で返事を返すことを好み、吸収脳とは相手の言葉や単語それぞれの関係性から相手の発言の意図を推測しようとするなど熟考後に返答をすることを好むものである。

反射脳と吸収脳をコンピューターで例えると、反射脳は近年飛躍的な進化を遂げたAIが生まれる以前のコンピューターのように、既に蓄積された知識の中から最適解を瞬時に導き出すことに秀で、吸収脳はAIを飛躍的に進化させた技術として知られるGoogleが2017年に発表した「Transformer」という技術の中でも最も重要な機能の一つである「自己注意機構 (Self-Attention)」のように文章の中のすべての単語の関係性をはかることで、文脈や単語の意味を理解し、適切な文書を生成することに秀でるChatGPTなどのAIタイプと言える。

反射脳と吸収脳についても能力の優劣ではなくコミュニケーションを取る際の癖なので、大切なのは自分自身の癖を理解し、己の癖を意識しながらコミュニケーションを取ることでこれまで以上に良好なコミュニケーションが実現することが最も重要なことである。このため、反射脳と吸収脳に関してもレジリエンス力同様に今後研究を進めていきたいと考えている。

表5 反射脳と吸収脳のコミュニケーション時の特徴

反射脳	吸収脳
・言葉や単語を聞き、即答で返答する ・一部の単語に反応する傾向が強い ・クローズドクエスションの会話がが多い ・権威のある人やマスメディアの意見を尊重しがち ・自分の考えを伝えることに重点をおく ・相手の意見に「答える」ことが主目的	・言葉や単語の関係性を熟考したのち返答する ・文脈全体を重視して言葉を選ぶ ・オープンクエスションの会話がが多い ・権威のある人やマスメディアの意見を参考に考えを構築する ・相手との理解を深めることに重点をおく ・相手の意見を「理解する」ことが主目的

6. おわりに

Digital Transformation (DX) により社会は飛躍的に効率を上げることに成功し、更にAIの進化が加わったことで社会はインターネットの登場以来の大きな変革期を迎えようとしている。しかしそれだけにデジタルだけでなくアナログ的な要素にも目を向ける必要性が増していると感じている。

そこでDigital Transformation (DX) に対する新たな概念として、Interior Transformation (IX) の提唱をしていきたい。

IXとは人の内面 (Interior) の特性は意識をすることで変化させることが出来るので、プロフィールやアセスメントなどのツールを活用し正しく理解し、自分の得意と苦手や相手の得意や苦手それぞれ違うことを意識することで、コミュニケーションの取り方をTransformationさせることで心理的安全性の高い環境を生み出す取り組みを指す。

これまでの実践からアセスメントツールの活用が学生の自己肯定感を高めることに有効であることがわかったので、自己肯定感の先にある他者肯定、相互尊重を学びの場に広げていくことで学びの場における心理的安全性を高めることに寄与していきたいと考えている。

参考文献

- (1) 河口紅 1, 大脇巧己 2, 吉田賢史 3 : “子どもの思考特性に応じた効果的な指導法”, PCカンファレンス 2010 分科会発表論文 2010 年
- (2) 吉田賢史 1, 篠田有史 2, 大脇巧己 3, 松本茂樹 4 : “能動的学習を刺激する”, PCカンファレンス 2016 分科会発表論文 2016 年
- (3) “Newton2025.3 月号” 12-13P 株式会社ニュートンプレス (2025)